

研究要旨

手術治療および抗体治療を行った患者 11 例に対して、QOL についてのアンケート調査をおこなった。11 例中 10 例は好酸球性副鼻腔炎の診断基準を満たし、重症が 6 例、中等症が 4 例であった。1 例は病理学的診断基準をみたさなかった。7 例は手術加療のみ行い経過良好であった。4 例にてデュピルマブを導入した。いずれの治療選択においても、治療開始後半年までの QOL 評価は高い傾向にあると思われた。

A. 研究目的

難治性疾患である、好酸球性副鼻腔炎における手術治療および抗体治療患者の治療後の QOL 評価を行うとともに重症化予防について検討する。

B. 研究方法

手術加療および抗体治療を行った患者に対して、QOL についてのアンケート調査を行う。

（倫理面への配慮）

倫理委員会の承認の上、書面にて十分な説明を行い、同意を取得し実施している。

C. 研究結果

手術治療および抗体治療を行った患者 11 例を研究にエントリーした。11 例中 10 例は好酸球性副鼻腔炎の診断基準を満たし、重症が 6 例、中等症が 4 例であった。1 例は病理学的診断基準をみたさなかった。

7 例は手術加療のみ行い経過良好であった。4 例にてデュピルマブを導入した。

1 例は手術治療後 4 ヶ月までの QOL 評価は良好であったが、感冒後から嗅覚維持が困難となり、9 ヶ月でデュピルマブを導入した。2 例は過去に複数回手術歴あり、デュピルマブを導入した。1 例は重症喘息のため、手術に先行してデュピルマブを導入した。

D. 考察

現在のところ、症例数が 11 とデータ数が少ないため、データ解析は行っていないが、いずれの治療選択においても、治療開始後半年までの QOL 評価は高い傾向にあると思われた。

治療後、半年以降の再発例もあり、さらに長期の

QOL データの蓄積が必要と考えられた。

E. 結論

手術治療および抗体治療を行った患者 11 例に対して、QOL についてのアンケート調査をおこなった。今後、さらに症例数を蓄積し、治療ごとの QOL の経過と再発例について検討を行っていく予定である。

F. 健康危険情報

本研究に伴う有害事象は認めなかった。

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし